



第 五 號

▲ 目 次 ▼

女	寄贈新刊	編輯餘言	艸	征露	藤	古	火	低	短歌談片	白	詩家と讀詩	夢	籠のうち	四月	女學生日記	庭	梅の戸
	賦(長詩).....一條柳爾	吟(漢詩).....郷川客懶	(俳句).....すゝさ會	籬(俳句).....木の葉會	柱(短詩).....米子支部啄草	唱(短詩).....松江支部啄草	(評論).....袖 影	影(短詩).....尖戸梅軒等	(評論).....翠 敬	(短詩).....濱田支部啄草福田紫雲	賦(短詩).....岩崎酌芳さひは	男(長詩).....有松曉衣藏田のぶ子

(長詩).....河野翠嫩

梅の戸

藏田のふ子

大母慕ひ泣くべき室と「詩」に
よらんきのふ巢立し小ひさ雛鳥
その胸に奇しき力の物よぶと思
ふにもなほ神をわするゝ
とふ蝶の行方追はんと來し野邊
にあぬ人よと袖なれにけり
得べき世に又古へのあるべしと
惜しからぬにも省みらるゝ

庭男

有松 曉衣

庭男今年廿歳廚女を戀ふ
門に咲ける緋ざくらには
ひと夜の雨に散らひて
鳥も啼かぬ朝あけを
には男よくねむりぬ
ねやの窓を花うちて
忍ばしき音そは何
笑みて夢を語らむに
さてはらくし其かげ
風のあした掃き庭に
竹把をにぐる花びら
追ふと見しか誰が袖の
かくて薫りは残るよ
夢に會してねどろきの
手にくつがへる酒こそ

戀の興とひとは云へ
そこを嘗るはつらしや

その思ひを知り酌みて
稚女厨裡にひをかみ
そとすゝむる 濁酒の
醉にうれひはなけむも
尙ねがふは血ある身の
たのしき夢を笑むべう
花に露ををしませれ
風にはもろき宵をと
小袖ひきて寄り見れば
苔のみぬるき捨て石
吻けては今朝 恥ぢて
開くるに窓のれもきか

* * * * *

女學生日記

さかほ

▲某日。火曜日。雨。

「春眠不覺曉」昨夜あまりに空想に耽つたので、目覺時計の打つたも知らず。ねや、九時だわ、大變ね。又、飲課眉を出さなくつちやならないの讀みさしの「魔風戀風」を丁寧に乘して、机の上に置く。ね飯を濟めて、垢づいた海老茶を引つ掛けて下宿屋を出る。行きにも歸りにも、戀しい君には逢はなかつた、何だか淋しい日ね。雜貨店に寄つて、「キレー水」や「スマイル白粉」やを買つたものだから、下宿へ戻つたのは四時。袴も脱がないでいきなり机の抽出から寫眞を出して見る、矢張りイ、方ね。「郵便！」ねや、驅け出す出合頭にね神さんが「ね着んなさい」ッて手紙を渡す、紫インキで書いた封筒を見

ると、もう胸がドキ／＼して來た。引つたくつて室へ戻るが否や、小刀で封を切る。ね手の甘いこと！お情の籠つてること!!
思はず知らず接吻したわ。
(未完)

四月賦

岩崎 醉芳

ひさしひさし琴柱の折れぬ夜を
はめて二人し添へば物美しくしき
衣縫ふによるによろしき桃の晝
日向ぼこりの睡氣わたへぬ
名はさかず眞情こめし手の指に
力ればゆる愛着の執

髪すくに日長はゝゑむ椿さく紅
の香をふく四月となりぬ

籠のうち

福田 紫雲

美はしき彩翼
あでなる汝が身
虚空になかれし日この方
わが思ふだかれて
煩ひ闕へ、つきぬなやみ

若き詩人がかくうたふ
ひとふしきけば奇しきかも
翼しほみて醉ひしごと
あなよと見れば籠のうち
紅、紫、くさぐさの
花もてよそふ、わがかどは
のどけき春の光うけ
あせき蜜さへそへられつ
日ごとつきせぬ若人が
聲うるはしきうたのふし

きけばさながら夢のごと
げにや、野に見ぬ我世かな
虚空まひ行く身にしあれど
詩人がやさしきまごころを
そむきていかで花籠を
去なむにああなぞ忍びんや

夢 (新涼會 濱田支部)

△ 森岡 蹄花
夢にしてこの子が得たる物や何
轉ずる圓き玉と見ゆるに
かをりぬる夢か春野の色なして
霞をなして想像湧きこし

△ 河野 素陽
たまはりし美しくし夢のにひ衣被
ぎまるりぬ春のわけほの
ねはけなくもうまし我歌選に入
りて天のねん扉に刻されてける

△ 増野 翅白

冠たび天なる榮をゆるされて彩
羽まとはむよき折もこそ
若草にまろばむもよし春の風紫
靄は身をおほへなほ

△ 伏谷 敏子
行く君をみ袖に怨じ倚りし戸や
月影ゆらぎ梨吹雪しぬ
花の香や水あたゝかき春の野の
胡蝶が夢も神にかよへば

△ 野田 ゆきを
戀成りてもたむの律も覺ゆる
かくてぞとはの夢にこもらん
事はみな天のみ旨に副ふべきと
み眉静かに動きぬる人

△ 園 子
戀はそれ紅き眞白き春花の中に
しつひの地はもとひとぞ
このままに籠めむ秘めよとわけ
がたの夢はみ神の奪ひ去にけん

詩家と讀詩家
とに寄す

翠 漱

△詩歌の旺盛今の如きはあらじ、古
へ大宮人のすさびにのみ限られたる
和歌や、一部少數の脱俗者によりて
試みられたる俳句や、明治昭代の今
日、苟くも眼一丁字あのもものを是を
翫賞し若くば創作せざるなきに較べ
て、いかに寂寞の感ありしかに思ひ
及びては、我等聊さか詩を愛するも
のの、快とせざらんとするも得ざる
に非らずや。
△抑々詩歌は想裡深奥の聲なり、人
、生を高等の地位に亨くる上は漫然
米食の生涯に終るべきにあらず將た
自ら疑問のうちを葬られ終らんも口
惜し。假し到達し得られずとするも
、宇宙の解釋は或る程度にまで究め
られざるを得ず、かの宗教の極致は

我と宇宙と渾融するの必然を有す、
詩歌の極致また然らざらんや。
△宇宙と個人との渾融は、これ不可
思議の解釋也。哲學によりて究竟を
認識せんとする恰かも蟻の天上せん
が如く、科學萬能の輩世々新説を繼
紹せんも断じて到り得べからじ、宇
宙の解釋は唯天宗教と文學とあり、
以て爲さるゝを得ん乎。
△夫れ、詩歌は幽遠なる人心の蕪奥
に源を發し、幽遠なる人心の蕪奥は
やがて宇宙の眞體と冥合喚和せらる
。故に我等は、形式の末に趁り、又
上の意を忘却したる詩歌に對しては
何等の尊敬と何等の感興とを拂はざ
るべし。
△自然に立脚すると、理想に根源を
發するを問はず、唯夫れ人生と宇
宙との機微に觸れたるものを、詩歌
最後の成功として、我等の任務を終
らん也。

△然れ共、是、千萬中一人の天才者
あり、以て這の般痛快の目的は達し
得らるべきも、亦多くの渴仰者と熱
愛者との功をも没却するに忍びず、
寔にこれ等一將の功を譽げんがため
に、倒るゝ萬卒の隠れたる功勞に對
して、一片感謝の誠を表するの至當
なるべきを信する也。
△人は間斷なく精進すべし、精進は
やがて天才者を出すべき最良の方法
なれば也。趣味の鼓吹可なり、讀詩
家養成また甚はだ可也、自ら詩歌に
筆を執るも、値ある鑑賞家たるも、
夫益々可也。これ等の方法によりて
、極致に達せん階段を作り、我等最
後の月桂冠を戴かざるも、埋れ朽ち
なん運命に終らんも、一步天才者降
來に近づくべき機を與ふるを得ば、
莞爾己が天職を完ふしたりと云はざ
るを得んや。

△縣下幾多の讀詩家と作家よ、唯夫

適所に安して、將來一個我等の犠牲
に光明あらしむべき大詩人の出現を
期待するに於て倦む勿れ。
△某々子の間に答へんとして敢て一
文を草す、首肯せば太はだ可なり。
春趣漸く動いて、諸君の吟懐亦將に
豊かならん、乞ふ愛養せよ。
(三月四日稿)

▲白毛の馬

木 風

山越に谷越に河越にて
雪にあられに雨の日も
出るよお里は女にて
今年はたちになりぬれど。
姉さんかぶりにこの歌
なれし白毛の馬つれて
雪路にたかき「阿無埜」を
けふも里はこゆるなり

白影

○ 宍戸梅軒(岩代)
あたゝかきやさしみ胸にいたか
れてうまひの稚兒と我笑まけ
る

○ 古瀬露香(大原)
笹の雨しばし机にまどろめば詩
神やいづこ夢圓かなり

○ 土谷紫仙(大原)
平和のその美はしき犠牲とさく
ら背負ひて出でし武者振

○ 田邊馬笑(邑智)
銀鈴は鶯姫が讚に似てこゝよ詩
の國はがらかに鳴る
美しくうみ髪梳りて糸柳春うら
いけく風になびさぬ

○ 野田ゆきを(濱田)
ラケットを持つわが右手に梅ち
りて香りはみちぬ身は天のもの
菊ささぬあふげば月に香もあり

藤なみの花のそよぎに鳥籠の緋
房もゆらく春のやは風

○ 梅原梅窓(八束)
かゝやかば孔雀の彩とかゝやか
むふたゝび我に榮甦る

訪ひよれば光明の國へ導くとた
びしみ旨に畏こまりぬる
春雨は戀のみ神がたくみにてし
づかに花を葉をそだてける

○ 佐々木春濤(米子)
天地の御力凝りてなりし子にな
にゆゑせまる「のろひ」なるら
し(病床に)

ひと花の落つる響にねどろかる
さばき來るよと安からぬ身や
草堂に春の雨ふる夕ぐれや眞白
き花の夢とこぼれぬ

美しと思ふに我に夜の夢や白き
影して魔はれそふらし
○ 鈴木曉星(那賀)
生れ得て千年よき夢美しくう歴

秋のまろうとよき歌を誦せ
ふくるふや杉の木立に月淡しあ
さまし秋に人をねたみぬ

○ 山下石泉(邑智)
入送る花のわしたのひと時をゆ
るせ鶯詩はあざらり

願くば胡蝶となりて春の夜を花
の女神にみ詩聞くべき

○ 立田紅翠(松江)
われどわがつくりし笑みのいつ
はりに女かなしき緋牡丹の花
鑿の手に像はなりぬ黄金扉や春
よそぼひの一門くいる

かなしみの潮が巻くに任せよと
名はたまひたる處女なるべき
うつし世にたゞひと時をゆるさ
れてはゝかりあらぬ戀もしるべ
し

○ 前田木風(米子)
瘦肩に御袈裟かけたる若き僧經
誦す聲の春にくもりぬ

史かざると身はほこるべき
名と榮はねばかた人にまゐらせ
てあかぬ思ひに我は春經ん
新らしき天のみのりを傳へんと
驚なれば野にうまれ來し

○ 内田白百合(松江)
堤半里若草もねて花ささて春を
胡蝶の舞に酔へどや
死か生か神の秘めますおん胸の
小琴にふれて清き音をきけ

物みなを空と果かなむ人あはれ
神による子の春や永久
御怒りの焰追ふてふ旋風にも地
なるとがはどはに殘れる

○ 立石洲洋(八束)
南(よがは消ゆべ)
の雲井のよそに君ゆくど涙
に破れぬ春のわが夢

○ 河野素陽(濱田)
ねはらかに召されてまゐる一人
どと春の夕をかしこまれける

ゆるやかに春の夕日を背にあび
て京を南へ白鳩のかへれる
朧月明日は銚子へ下り船今宵限
りか利根の船唄

詩にあきて春の夕に我やみぬ鸚
鵡しつかに春の譜うたへ
絹の繪に光もつ子の掌天の御
神よ藝術をめるせ

われ病まで歌に寝ねたる朝空を
生駒葛城花雲ながる
大倭永久の光の美はしく彩雲榮
ゆる春のみ園や
そとむよる蘇生の風にはい笑み
て枕かくしぬ春のねぼろ夜

○ 山本明星(大東)
天降る君がみ靈のねん供と五色
の旗に花吹雪する
み夢してわが面影を見せしを
若きたもひの君にふれてか
何祈る愛にもねたるねん眸聖壇
の白百合微動ぎ出でぬる

春の夜や奇しくも我の譜はなり
ぬ胸の小琴の美しさゆらぎ
めくらみぬ戀の痛手にめくらみ
ぬくらむ我眼になほ紅の色
春の野に二人しあらんものなれ
ばなごさびしらを告げまゐらせ
む

さかしらの狸が舞は今日どとて
たくれればせにも狐參んする
○ 米村水聲(松江)
美しと春汐つゞく海原に双鷗

を見てもありにさ
わが歌とくらべも見むと連翹の
さ庭に來ては鶯のなく
園にたてばわねかなる頬に花散
り來われやうたひて草に寝てま
し

み手とりて董つみにし春も昔四
つのかの色あせぬ、今
美し子の聖旨かしてみ今日得た
るよろこび祝ぐど鶯のなく

短歌談片

袖 影

一日客と清話す、談新派和歌に及ぶや、客匆惶問ふて曰く、

▲新派歌人は殊に陳腐を厭ふもの、如し、而かも彼等が詠む所の、往々斯の弊に陥るもの多きは奈何。

△然り。誠に寒心に堪へど、某の構想、某の修辭の、兎角流行に傾むくは貴意の如し。蓋し、一の清新なる佳作に接せば、讀む者自ら非常なる興味を感ずるが故に、是に同化せられたる結果、人心自然の傾向として、自ら再生的に同一事態の現はれ来る現象を呈するに至る。

▲是を摸倣にあらすと云ふや。△然らず。

摸倣は元來、未だ一家を成さざるもの、當然踏むべき徑路ともいふべければ、多少の看過を與ふるも可なら

ん。然れ共、摸倣は詩人の最も愧づる所なれば、態度の陋なるは、今更言ふまでも無し。唯、初學者の間に於てのみ些少の摸倣は許すべしとせむ。

▲今の歌は摸倣多しとは思はざる乎△多かるべし。さりながら、和歌はいま、新たなる道途に入りて、過渡期の時代ともいふべく、從て詩人は各自苦心慘膽たる境地に在れば、完全なる發展を成したるものとして、論らふは酷なり。若し一首會心の傑作世に出でなば、多くの詩人と共に、前途の光明を憧憬して、あらん限りの讚美を吝む勿れ。

其他詩形論、時間詩論、叙情及叙景詩論等に涉りて、興味ある問答あれど紙面の都合により次號に廻せり (編者附記)

低唱

(新涼會 松江支部)

立石 洲洋

△ ればせ君さはおぼさずやかのづから春風戀の譜をはこび来る (笑風兄に)

△ こは夢か今うけまつるみ教のみ聲と知るに雲をへだてぬ (枯狄兄に)

△ 弱き子がみ階を近くさいはいやさもらひなれんさてかくのごと (征帆兄に)

△ 坂本 笑風 若うして十四卷のさすらひを母あやぶみしみなさけおもへ

△ 金本 征帆 低唱の君が詩をぞろ興惹くに紫雲我巻き樂鳴り出でぬ

△ 人もあらぬひと間紫蘭の香に満てば琴れのづから鳴りも出づべ

火柱

(新涼會 米子支部)

佐々木 春濤

△ 若き子の悶ね戀ひぬめしひては火をふく山の石どころばひ 驚がよき音はがらに嘯づればね たみあるべき我小野の鳥

△ 田中 雪兎

△ 今は去る身春の花野へともなひて君が御袖に涙のこさむ 白鳩のふとわが胸にしぬび入り 鳴さぬと見てし夢や月さす

△ 前田 木風

△ ねがはくば我が名と君が名とならべ石にささみて千歳秘めむ 思はれむはのほどもゆる君が胸 われを入れるにまたあまひある

○ 洲 洋

若草に陽炎立つや陣の跡 兄長けてさすがは兄よ二日灸

古籬

(米子 木の葉會)

春の日を歌反古敷て眠たり鳥 雪 兎 はこりがの古籬多き長者哉 不 男 籬の間に鼠の音や夜の雨 萩 平 行く春を病蠶あまた捨てて鳥 木 風 貝寄や難波の海に唇氣樓

藤

(大東 すすき會)

咲きからむ柚が小家や藤の花 白 桃 窓掛の紫にして藤の花 洋 州 藤花や仁王の顔に散り掛る 百 笑 観音の小さみ堂や藤の花 春 郊 藤棚の藤紫に咲きにけり 翠 蔭 瀧壺に流れもあへず藤の花 しせん 藤咲くや斷崖に日の斜なる 梨 雨 白藤や山深くして晝の月

▲若 草 (第壹號)

大原郡大東町新涼會大東支部より新たに發行せる文學雜誌也。翠激の「同人譜」葉櫻の「よき名」明星の「わか草」其他短文短詩通信等を載す。參錢を投じて趣味ある此愛らしき雜誌を繕かんは仲々に興あるべし。

征露吟

郷川 客漁

二月十日夜同打荻暢園賦 賦五首

陸海傳連捷 戰機常制先 今宵

須痛飲 征露一周年

義戰曠千古 皇威覃四邊 詞臣

須獻頌 征露一周年

戰士氷霜裏 心腸鐵石堅 史編

須特筆 征露一周年

旌鼓壓胡塞 隣邦依得全 風雲

須席卷 征露一周年

旅順開城後 南洋進戰船 此時
須發憤 征露一週年

艸賦

一條 柳雨

沼の小艸緑うすくあせて
唇ぞ薦たき紅に染むる
あゝ途せよき行手を君よ
臙ろに黒き滴流るゝ
葩傷くを君惜ますや

生命あるものぞ誰か知らん
夏こそ知りて許せ此葩
見よ皆蒸せるすいしき地に
あゝ亦笑みて笑をも助け
極熱かくて何傷はん

ヒースの香深く傍に燃わて
息なき花と俯し拜め

生命の甦る葩ぞ少くも

「あゝまた我等何及かんや」

小艸と遠き海に生きなん

せまき我胸地球に悶うか

若き記憶よ要求よ充ちぬ

花こそ知らぬ母とは聞けかし

生ふるを悦こび熱の日過ぐる

色且添ひて苜蓿に映ゆ。

風の晒すか強き小草

見よ白けては徘徊ふ牛の

「麥畔踏みし雞の足より」

重きに葩の傷はれんを

そよぐ風しも艸こそ護れ。

草の名露の運命を問ふな

色濃さ中に息や保てる

生命や甘き死や其葩に

痛苦を與ふか人何知らん

黙示に暗きそは我眼ぞ

和風に生ひし我露草

緑の此野ぞ春を誘く

葉月の静けき物事こそ

終へぬ半に日影さしくれ

あゝみな月に生長つ小艸

紅匂ふそは唇と

露草我に秘事似るよ

其名は君知る愛の名どこそ

其傍は艸よまた見る

その面歡喜の源ぞこれ

烈しき陽に見上重き沼水

花も亦知る色さへ變りぬ

あゝ露草緑の孟夏まで

生きずや碧き若葉に彼を

想はで枯れゆくそは運命か

編輯餘言

▲「銀鈴」第六號(七月一日發行)は夏期
號として聊休裁を一新し。江湖に見
ゆべく候。紙數を増加するは勿論、
諸家の寄稿、會友の作等滿載し、且
同人が詩に對する態度を表明すべく
、其他表紙繪を改め、挿畫を設くる
に就ては、畫伯杉浦朝武氏の快諾を
得たるを以て、亦諸君の目を樂まし
むるものあるべしと窺かに自信致し
居候。投稿は六月三日を以て嚴に締
切るべく候。
▲同號に限り一部賣金七錢を申請く
べく候。

▲銀鈴四號まで一部の殘本も無之候
▲本誌は前號より前金切の諸君に對
し發送を停止致居候。
▲終に諸君の健在を禱り候。
▲尚、本社維持費へ寄贈を辱ふせし
諸君左の如し、掲げて感謝の意を表

す。

- 金六拾錢 山路蔭村君
- 金參拾錢 立田 某君
- 金五拾錢 藏田二葉君
- 金參拾錢 古瀬露香君
- 金五拾錢 山本明星君

▲寄贈新刊▼

- △白虹(一ノ四) 岡山血 沙 會
- △艸笛(三ノ三) 松江報 光 社
- △文庫(三ノ三) 東京 内外出版協會
- △國詩(第一) 東京 國 詩 社
- △曙光(一ノ二) 岡山 曙 光 會

女

河野 翠漱

をどこのいさの
かゝるときき
そんなのかみは
頼ふべし。

をんなごゝろの

やさしさを。

をどこなにとて

いなまんや。

こひてし日より

ひとすぢを

あゆむとすれば

なつかしき。

あゝ春さむき

びんの毛の

いといたましく

みだれなば

そでにればへる

ひとまきの

うたにおもひは

つてよかし。

*** ** *

大屋 桂水

○ 戦慄のそはよみがへるみ聖旨と
舊衣ぬぐには、笑まれぬる

國

詩

初號 三月一日發行

每月一回發行
【國詩】の生れたるは偶然に非ず機の將に到來したれば也故に【國詩】の行動は天馬空を行くが如し

【國詩】は内容實なき時は大家の作と雖も斥け實ある時は無名青年の作と雖も喜んで本誌の全部をも犠牲に供すべく主義の前情實なく創作の上闊闕なし
【國詩】購讀者にして一ケ年分代金七拾錢前金を以て申込める者は社友とす
社友の作物にして秀逸なるものには一篇金廿五錢以上金五圓以下の謝儀を呈す
社友以外の投稿も併せ求む但し謝儀は呈せず

編輯係

清水橋村
松原至文

明治卅八年四月廿三日印刷
同年五月一日發行

(一部金五錢)
郵税共

編輯者 島根縣邑智郡田所村大字下田所 七百三十二番地 河野岩雄
印刷人 木村柳三郎

寄稿中新體詩、散文詩に限り如何なる長篇にても秀逸なるは掲載の上薄謝を呈すべし
但社友の創作に限るものとす

【國詩】には大町桂月、尾上柴舟、武島羽衣、田山花袋、中村文學士、小島烏水、江見水蔭、島崎藤村等の諸先輩及知名詩人の應援せらるあり
【國詩】は當代の青年詩人三百餘名を批評す

【國詩】は新體詩、俳句、短歌、散文詩等の機關なり

【國詩】賣價は一部金七錢六部金四十二錢、十二部金八十錢(直接申込)なり
體載菊版總色紙二十四頁以上外形頗る奇

發行所 島根縣邑智郡田所村 二百八十一番地 赤名活版所
發行所 銀鈴社

發行所 東下四 澁二 京谷○ 國詩社 大捌 賣所 日區河 本城岸 橋邊 中圖 外局 書